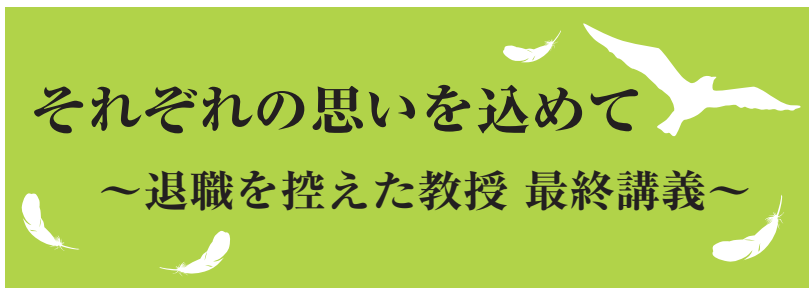


2月以降開催予定の最終講義

日付	西宮上ヶ原キャンパス 大学院Ⅱ号館3階模擬法廷	時間
2月14日	川崎英明・司法研究科教授	15:00~16:00
	永田秀樹・司法研究科教授	16:00~17:00
神戸三田キャンパス Ⅶ号館103号教室		
2月21日	加藤直樹・理工学部教授	13:30~15:00
25日	水木純一郎・理工学部教授	15:00~16:30
3月9日	海老原史樹文・理工学部教授	14:00~15:00
西宮聖和キャンパス 1号館2階会議室1		
3月7日	井上久夫・教育学部教授	10:00~11:00
	田淵結・教育学部教授	11:15~12:15



1月の初旬から2、3月にかけて、2018年度をもって本学を退職する教授らの最終講義が行われている。1月中旬に、西宮上ヶ原キャンパスでは8名、神戸三田キャンパスでは4名の教授らが講義をおこなった。2月以降も各キャンパスで計7名の教授らが最終講義に臨む予定だ。非常勤講師として今後本学で講義を行う教授もいるが、最終講義は研究における一つの節目である。自身の遍歴を語る教授。自身が研究で目指してきたことや、これまでの研究から得た結果や見解を語る教授。学生に対してアドバイスやメッセージを残す教授。それぞれに思いを込めた講義の内容はさまざまであった。また、学生時代にお世話に



2019年2月15日 第842号



発行部
関西学院大学新聞総部
〒662-0891
西宮市上ヶ原1番町1-155
関西学院大学新学生会館3F
電話：(0798) 51-1181
E-mail: kgpress2009@yahoo.co.jp
HP: http://kgpress2009.wixsite.com/kgpress2015
Twitter: @kg_shinbun



1月26日に、企業家や企業を志す人を対象に、大阪市女性起業家情報交流協会主催の「Wes フォーラム 2019 Innovation concept」が開催された。会場では、2名のゲスト講演者の話を通して、150名の参加者が意見交換やディスカッションなどを行なった。ゲスト講演者として、株式

な教授の最終講義であった。中には聴講するために遠方から駆け付けた人もいた。教授自身にとっても、聴講した学生や卒業生にとっても印象に残る90分間となったのではないだろうか。長年本学で教鞭をとってきた教授の最終講義、時間をつ



熱心に講義をする浜野教授

くって訪れてみてほしい。何か得られるものがあるはずだ。

A creaking gate hangs longest.

1月26日に、企業家や企業を志す人を対象に、大阪市女性起業家情報交流協会主催の「Wes フォーラム 2019 Innovation concept」が開催された。会場では、2名のゲスト講演者の話を通して、150名の参加者が意見交換やディスカッションなどを行なった。ゲスト講演者として、株式

会社マザーハウス副社長の山崎大輔氏と、本学の経営戦略研究科ビジネススクール准教授の大内章子氏が登壇した。山崎氏は、2007年にゴールドマン・サックス証券を退社。その後、大学時代のゼミの1年後輩であった山口絵理子氏（株式会社マザーハウス代表取締役兼チーフデザイナー）が始めたマザーハウスを経営面からサポートするために参加を決定し、同年にマザーハウスの副社長に就任。現在、マザーハウスは国内31店舗に加え、香港および台湾の55店舗で販売を行っている。マザーハウスの特徴は、バッグやジュエリーの生産を途上国で行なっていることだ。途上国の人々とも対等な立場を築き、途上国の良さを商品を通して、顧客に伝えている。大内氏は、総合商社勤務を経て、働き方への疑問から慶應義塾大学大学院商学研究科

に入學し、博士課程を修了。その経験を活かし、本学にてハッピーキャリアプログラム「女性の仕事復帰・起業コース」とその姉妹コース「女性リーダー育成コース」の企画運営を行なった。フォーラムは3部のプログラムに沿って進行された。第1部の「過去を振り返って」で、山崎氏は「自分を変えたのは、当時、僕の周りにいた人と環境だった。だから、誰とどんな環境にいるかがとても大切だ」と語った。山崎氏にとつての成功の鍵は、企業から共に戦ってきた山口氏であったそうだ。また「やりたいことを口にして、周りの人に知ってもらうことから挑戦は始まる。時には、そこからチャンスが生まれる」とも語った。恥ずかしがったりためらったりせず、まずは口に出して発信することの大切さを伝えた。

第2部の「経営者になった今」では、経営者としての山崎氏の苦悩が語られた。現在、マザーハウスは日本国内だけで約200人の社員を抱えている。その中で山崎氏は、社員のマネジメントと、プレイヤーとしての自分の仕事を両立させる働き方を模索し続けてきた。その為に必要となる



思いを語る山崎氏

このフォーラムのテーマである「イノベーションコンセプト」は、参加者がこのフォーラムを通して、一度個々のイノベーションコンセプトに立ち返ることで、今後の自己実現と事業発展の一助となることを願って考えられた。10年後、今回の参加者それぞれが描いた未来が実現されていることを、願うばかりである。

第3部の「10年後未来に向けて」では、参加者それぞれが10年後への希望を示し、ディスカッションを行なった。様々な意見が出た中で、山崎氏は「人材を育てる会社が増える未来」を望んだ。会社で新たな人材を育成し、気持ち良く送り出す。その繰り返しで、日本をより発展させる鍵なのではないかと彼は述べた。

- 1面 最終講義 ポプラ
- 2面 教授の背中 扉の一言 お店探し隊
- 3面 日進月歩 K.G. History
- 4面 震災に備える 5・17・3・1を受けて

Izumi Syuppan
パンフレット、記念誌、報告書
制作・編集、デザイン

和泉出版印刷株式会社

【本社】
〒540-0026 大阪市中央区本町1-1-6 本町カノビル
TEL: 06-6946-1073(代) FAX: 06-6946-7684
E-mail: info@izumi-syuppan.co.jp

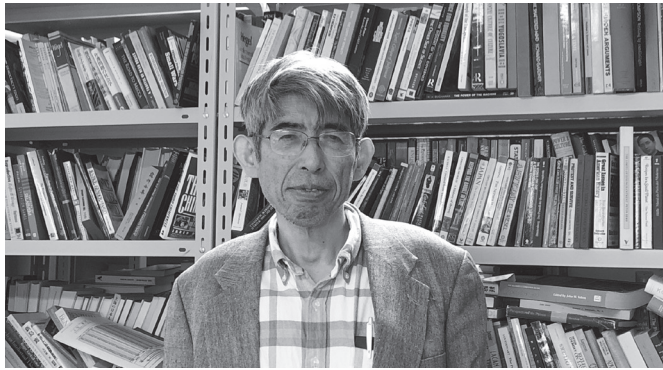
【和泉営業所】
〒594-0083 和泉市池上町4丁目2番21号
TEL: 0725-45-2360(代) FAX: 0725-45-6398



登壇者の話に聞き入る参加者

「風に思う空の翼、輝く自由 Mastery for service」1933年に前年の大学昇格を記念して作られた、北原白秋作詞、山田耕筰作曲の関西学院大学校歌「空の翼」の歌いだしである。この二人の人生を描いた映画「この道」が、日本の童謡誕生100周年を記念して、今年1月11日に公開された。童謡とは、子どもに歌われることを目的に作られた創作歌曲のことだ。作中では、福岡県柳川から文学を志し上京した、破天荒で自由奔放だが、奇抜な詩で名をはせていた北原白秋と、ドイツ留学を経て日本で初めて交響楽団を結成した山田耕筰の二人が出会い、ぶつかり合う中で多くのいまだ歌い継がれる童謡を世に出していく姿が描かれている。この時代の子どもたちは、彼らの作る童謡で大変元気が付けられていた。今日に至るまで、彼らの童謡は歌い継がれており、現代の子どもたちが歌っている姿を見ることがある。歌には、人の心に寄り添って癒す力がある。時には過去の思い出を歌によって思い出し笑顔になったり、涙することも。今、二人が生きていたらどんな歌が生まれるだろう。ただだけの人の心が癒されるだろう。どんな思い出を思い出させるだろう。「空の翼」も、いつか私達の心を癒し、学生時代のことを思い出させる、そんな歌になるだろう。





教授の背中

浜野 研三

文学部 教授

文学部の浜野教授は、哲学・倫理学を専門としている人間について、そして人間の生きる社会について、自身の道徳哲学を基礎に研究を続けている。

幼いころから本が好きだったという教授。ドストエフスキを小学生の頃に読み、中学生の頃にはすでに哲学を志すことを決めていたそう。

学生時代はフランスの哲学者ルネ・デカルトの研究を行っていた。デカルトの生きた時代は科学革命の最中。教授は新たに生まれた自然科学的な人間観と伝統的な人間観との関係について考え、人間の心と体の関係を理解しようとした。その後、人間へのさらなる深い理解を求め、英米の分析哲学に興味を持ち、ペンシルベニア大学に大学院生として留学。現代の進んだ科学を正面から受け止める必要性を感じ、その上で哲学の探求を行おうと考えた。現在教授は「人間全体を理解するためには自然科学への理解、それと同程度に文学、社会科学への理解が必要だ」と語る。

教授の道徳哲学の根本には、人間は社会的な動物であるという考えがある。

人間には本来、お互いに助け合い、協力し合おうとする傾向があるというのだ。しかし、育てられ方や社会の慣習、制度のもとでその傾向がゆがめられる場合が多々ある。

人間本来の誇りが守られる社会を目指して

人間本来の良い傾向を発揮できず、いじめや差別といった社会問題が後を絶たない。この良い傾向をゆがめているものを正すことが広い意味での政治の役割だと教授は言う。

そこで考えるべきが、道徳哲学を基にした政治哲学だ。「今の日本のような、投票や多数決だけの曖昧な民主主義ではない。人間と人間の正しい関係のあり方、平等なあり方を実現しようとする民主主義を目指す必要がある。そのためのビジョンを作りたい。そういうことに貢献してゆきたい」と教授は力強く語った。

最後に、学生に向けて教授は2つのメッセージを残した。一つは「F・フストンの『すべての政府はうそをつく』という言葉覚えてほしい。自分の生きたいように生きられる自由な、開かれた社会をつくるために、勉強してほしい」というメッセージだ。また「能力の差という不平等は、確かに存在する。しかし、我々は人間である時点で基本的に平等なのだ。そのことを忘れずに誇りをもって生きてほしい。その誇りを傷つけるものに対して怒ることができる気概を持った人間として生きてほしい」と二つ目のメッセージを語った。

浜野教授は今年度の3月末で退職。来年度からは非常勤講師として本学で講義を行う。

はまの けんぞう

- 1974年 京都大学文学部卒業
- 1980年 京都大学大学院 修了
- 1986年 ペンシルベニア大学大学院 修了
- 1987年 京都大学文学部 助教授
- 1995年 名古屋工業大学 助教授
- 2000年 関西学院大学文学部文化歴史学科教授

☆基本情報☆

- ・営業時間
11:00~15:00
17:00~22:00
- ・住所
西宮市松籟荘7-21
ニューコーペビル101
- ・TEL
0798-61-1555
- ・営業日
月~土曜日
一部の日曜日(不定)



独特の爽やかさの油そば

狙ったラーメン屋としてでも、おしゃれに心地よい時間を過ごすカフェとしてもない。そのオリジナリティである戸は、早くも激戦区で異彩を放っている。これほど誰にでもおすすめできるお店は、なかなか見られない。

がっつりと食べたい若者を狙ったラーメン屋としてでも、おしゃれに心地よい時間を過ごすカフェとしてもない。そのオリジナリティである戸は、早くも激戦区で異彩を放っている。これほど誰にでもおすすめできるお店は、なかなか見られない。



『A creaking gate hangs longest』

素直に訳すると「きしむ門は長持ちする」といったところ。病氣もなく健康な人よりも、一つくらい持病がある方が健康に気を配り、かえって長生きをするという英語のことわざだ。同義の四字熟語に一病息災があるが、こうストリートな表現は好きになれない。

身体が満足に機能していると、そのありがたみを忘れがちだ。足の小指を怪我すると、存在感を消していた小指の大切さに気付く。立って歩くのに小指も使っていたのかと。長生きするよう人は、存在感を消していようと、頭の先からつま先まで気を配っているのだろう。私もせめて、年中休まず働く脳みそに身体

の組織たち、免疫系に感謝の気持ちを持ちたい。下宿先で転がってばかりの墮落した私の身体の中にも出精な面々がいると思うと恥ずかしい気持ちにさえなる。

このことわざと出会った時、真っ先に思い浮かんだのは関西学院中部OBで、一昨年105歳で亡くなった医師の日野原重明さんのことだ。早くから予防医学の重要性を説き、成人病と呼ばれた病気の名称を生活習慣病と改めた。身体に気を配る大切さを伝えていた日野原さん、若い頃は闘病や療養を繰り返して、死の淵もさまよった。そのような苦境のなか、百寿を過ぎて医師として精力的に活動し、長命な一生を送った

ことは有名である。人間も生き物である以上、不具合の一つや二つ、あって当たり前だ。出来の悪い道具も調整してうまく持たせ、大切にすれば愛着も湧くものだが、私たちの身体も同じなのかもしれない。愛着を持って大切に扱えば長持ちするのは道具も人間の身体も同じだと言われると妙に納得がゆく。

このことわざを、自分の身体に不安がある人は振り所に、自分の身体に過信のある人は戒めとして常に持つておきたい。私も今日は身体を労わり、身体に優しくしてみよう。野菜を食べて、腹八分目。適度な睡眠に適度な運動。お酒は飲まない。これで身体は私を許してくれるだろうか。

おすすめのお店探し隊!

vol.20.

「麺屋 なる戸」

本学の学生をはじめ、多くの学生が行き交う阪急甲東園駅。学生の胃袋をつかもうと多くの飲食店が軒を連ねるその線路沿いに、新たな風が吹いた。

「麺屋 なる戸」は今年の1月7日にオープンしたばかりの、油そばとつけ麺のお店だ。周辺には多くのラーメン屋があるが、なる戸の雰囲気はそれらよりもむしろカフェ



霧田気漂う店内

に近い。インテリアとして飾られるのは、沖繩に行ったことがある人ならだれもが懐かしむサンゴや星砂、表面のインクが照明の光を艶やかに跳ね返すミニカー、何かを探しに冒険をたくなるセピア色の地球儀など。床のタイルは原色でカラフルに彩られ、店内は座っているだけで心地よい。

おしゃれとがっつり。対極にも思える二つの要素を組み合わせたこのお店のオーナーは、上原沙織さん。「学生をはじめ、幅広い層のお客さんに来てほしい」と語る。確かに店内を見渡せば、体育会系の学生であろう、本学のスウェットを着た大柄な男性たちのグループや、小学生らしき女の子もいる家族連れ、老夫婦、学ランを崩して着ている男子高校生、女性の一人客など、偏りが無い。並サイズ

の価格はリーズナブルでありながら、大盛り(100円)、特盛(200円)と、量の調節が利きやすいという点も、客層の広さにつながっているのだろう。

1995年1月17日午前5時46分、兵庫県南部地方で地震が発生した。阪神・淡路大震災だ。我が国の人口密集地に発生したこの震災は、多数の死者、家屋の倒壊・焼失をもたらした。

また、本学にも被害をもたらし、学生15人、教職員8名の命を奪った。物的にも被害総額は10億3千万円にのぼり、構内には半壊した建物もあって復旧費の負担も多大なものであった。

入学試験、定期試験など大学運営の最重要期に起こった震災は、本学に様々な難題を突きつけたが、本学の各局部は見事に尽力し、後世に教訓も残した。今回はその軌跡を追いかける。(T・M)

本学での建物の倒壊は免れた。しかし、中学部矢内会館と心理学研究館ハミル館は半壊し、理学部研究室で火災した。壁面の剥落や亀裂、屋根瓦の脱落、窓ガラスの破砕、建物内部では実験機器や書架、書類棚の崩壊なども相次いだ。



ボランティアの継承を

ボランティアは、災害時に救援の第一線に立っている。ボランティアの発端は阪神・淡路大震災であった。災害時、ボランティアは息の長い活動が求められる。

近年、大学が「ボランティア支援室」といった窓口を設置する事例が増えている。本学はその先駆けだ。支援室は、ボランティアをしたい学生に対して紹介活動やボランティアを行っている学生や団体の

K.G.HISTORY

辛い試験場となる校舎は入試までに修復可能な程度の損傷であった。当時、インターネットなどは無く、試験日を変更しても全受験生に周知することは困難である。大学当局はひとまず2月1日の入試実施に動くこととなる。

阪神・淡路大震災、あの時関学は…



出火した理学部研究室＝関西学院広報室提供

入試の実施に際し、最大の障壁は交通機関の寸断であった。特に、阪急今津線は門戸厄神駅と仁川駅の間で不通となっており、本学最寄りの甲東園駅には通じていなかった。阪急電鉄の協力により宝塚回りで受験生を誘導したり、教職員・学生が門戸厄神駅から誘導したりして混乱を最低限に抑えることが出来た。それでも、門戸厄神駅で下車した受験生は約30分、倒壊した家屋の多い道を通って試験場に向かうこととなった。混乱の中で行われる入試とあって、相当数の欠席を見込んだが、例年より1%多い程度であった。震災直後であっても受験生の努力がいかに高かったか見て取れる。

また、出願できなかったり、受験できなかったりした受験生に対して3月に救済の特別入試も実施した。こうして、震災直後の一大課題は完璧とは言えないまでも、受験生に対する不利を最大限に抑えて実施された。

もう一つ、大きな課題となったのは広報だ。当時、情報伝達は学内掲示が主体で

心の復興

東日本大地震から8年が経とうとしている。被災地では、区画整理された道路や新しい住宅が見られる。整備は整ってきているようだが、被災者は安心して暮らせるようになったのだろうか。

被災者は震災後に比べ、良い暮らしになったと語った。だが、もう以前と同じ暮らしには戻ることができないという。

現地は今も深刻な問題がある。それは恐怖や喪失感にさいなまれ、心身の不調を訴える人が後を絶たないことだ。抗うことのできない突然の地震や津波は、大切な人や財産すべてを根こそぎ奪った。助かった人は、自分だけが生

あった。しかし、多くの人が大学に来ることができず、通信機能も麻痺している状況下で、入学試験や定期試験を控えており、様々な情報を迅速に受験生や学生に伝える必要があった。まず利用されたのは新聞広告だ。1月中だけでも5紙に4回掲載され、次々と決定される情報を伝えた。受験生向けには入学願書受付の締め切り延長や入試日程など、在学生向けには休講、定期試験、追試、レポート締切日についてなどである。また、新聞が配達されていない被災地の受験生や学生に配慮してラジオのスポット広告も計110回放送した。

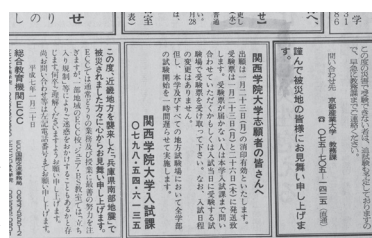
受験生や学生に対する情報伝達に加えて、報道機関に対する正確な情報発信も課題となった。震災直後は情報が錯綜し、「関西学院大学も倒壊し」といった誤った報道が全国紙に掲載された。このことから、電話回線の集中が解消されるにつれ、全国からの問い合わせが殺到した。これらは本学の対応のごく

この事象は東日本大地震だけに限ったことではない。戦争の悲劇や多くの災害に見舞われ、哀惜の記憶に苦しむ人は無数に存在する。そのまま記憶を抱えていると、人の心と体は悲鳴をあげるだろう。そこで大切なのは、心の復興だ。記憶にふたをすることで、被災者が、自分を形づくる大切な一部として、過去を振り返れるようになることだ。そのためには、支えや見守りが必要だ。被災者一人ひとりの心のそばにいて、支えることができるそういう存在が求められる。



門戸厄神駅から歩く受験生＝関西学院広報室提供

1995年はボランティア元年と評価されるが、本学でも震災に際し、多くの学生が自発的な活動を行なった。本学の学生や高等部の生徒2500人余りがマスター・フォア・サービスの精神を発揮し、肉体的・精神的なサポートに買っている。その年には本学で「関西学院ヒューマンサービスセンター」が発足し、組織的な学生ボランティア活動が行われるようになった。ボランティアに関しても、震災の教訓を経た、今日では学生ボランティアが本学の特徴の一つと捉えられるまでになっている。



受験生向け新聞広告＝関西学院広報室提供

文芸部 読み切り小説 「傍観者」

螺郡沙蜜

「傍観者」はしばしば外の何かを見つめている。それは食事のために立ち寄ったファミレスでの客のやり取りだったりする。虚ろな目で見ながら、たまにやり取りの内容も探ってみる。ファミレスで特に目立つのは、声も行動も大きく目立つ子供や人数の多い学生の集団だから、自然とそちらに意識が向かう。見られる側と目が合うことは稀だ。彼らにとって「傍観者」は背景、または不在も同然だからだろう。

「傍観者」はしばしば外の何かを見つめている。それは行き交う学生だったりする。「久しぶり」などといって妙にテンションの上がる人々をこくくたまに見ては、いつも理解不能だと感じる。「傍観者」にとって、久々に出会ってはしゃいでしまうほどの知り合いは思い当たらない。表出するほど心が高揚した記憶もない。彼らを見ると、自身にないエネルギーを感じつつも、異質で相容れないものと思ってしまうのだ。

「傍観者」はしばしば外の何かを見つめている。それはスマートフォンだったりする。その内部には「傍観者」が傍観者でいられないような情報もあれど、大抵のことは「傍観者」抜きで事が運ぶ。「傍観者」は時に、ライングループ上の自分のいないやり取りや、自分の参加しなかった成人式の写真などをみる。自分のいない会話や画像をさっと見ては流すように別のものに移る。それはニュースアプリで記事の見出しのみをさっと見ると変わらぬ。情報通信機器においても「傍観者」は他人を傍観する。

「傍観者」はしばしば外の何かを見つめている。それは自身の周囲に存在する情報を消費していると換言できる。あらゆる人間は意識的にせよ無意識にせよ情報の生産者といえる。「傍観者」もそうといえるが、そのことを「傍観者」自身が実感することは稀であろう。「傍観者」にとって、自身はほぼ一方的な消費者なのだ。そして、消費された情報はいつの間にか忘れ去られる。

「傍観者」は少なくとも眠るときには外を見つめない。目に映るのは真っ暗な部屋と嘘、そして直前の光景の名残などがつくる不完全な暗闇。「傍観者」はその暗闇の中で、感覚的に視覚に規定されることなく、自身に関係あることないことを思い出したり想像したりする。そしていつの間にか、思考が止んでいる。

「傍観者」は大き夢を覚えていない。それが他人にも当てはまることかはわからない。そして興味もない。夢を覚えていないのは、「傍観者」が自身の過去を見つめないからだろう。たとえ起床時に夢を覚えていても、「傍観者」は夢を消費しては忘れ去っていく。目の前の他の情報と同じように。

「傍観者」はしばしば外の何かを見つめている。その何かは今現在のことであり、今現在で完結する。「傍観者」は過去において、おそらく未来においても、今現在を見ては捨てる。

震災に備える ～「1.17」「3.11」を受けて～

～「1.17」「3.11」の教訓～

都市直下型地震の脅威が明らかになった、阪神・淡路大震災から24年。津波の危険性を再認識させられた東日本大震災から、8年が経過した。

これらの震災では、自治体などの防災体制が脆弱であることが示された。

また、市民生活にも震災は大きな影響を及ぼした。阪神・淡路大震災の後では「自助・互助・公助」の精神から、食料の備蓄や避難所の設定などが盛んに行われている。東日本大震災では、緊急連絡の手段として、TwitterやFacebookなどのSNSサービスが大きな役割を果たした。

震災から長い年月が経ち、「被災者」より震災を経験していない「未災者」が増加の一途をたどっている。そうすると、震災の教訓も100年もたてば、雲散霧消してしまうことになる可能性がある。だが2つの震災を乗り越えた現在、これらの「教訓」を繋ぐ主役として、「未災者」が未来の防災の中心に立たなければならない。

あなたが 今すべきことは……？

～日頃の備え～

災害時に命を落とさないために、必ずすべき日頃の備えがある。

一つは、普段から飲料水や保存の効く食料などを備蓄しておくことだ。この際のポイントは、防災のために特別なものを用意するのではなく、できるだけ普段の生活の中で利用されている食品等を備えるよう、心がけることだ。

もう一つは、地震が発生した際には「家具は必ず倒れるもの」と考えて、転倒防止対策を講じておくことだ。特に、寝室や子ども部屋には、できるだけ家具を置かないように心がける必要がある。

災害とは、いつ訪れるかわからないからこそ、私たちにとってどこか遠い存在である。しかし、日本が外国に比べて台風、大雨、大雪、洪水、土砂災害、地震、津波、火山噴火などの自然災害が発生しやすい国土であるのは紛れも無い事実だ。だからこそ私たちは、日頃から危機感を持ち、災害に備えることを忘れてはならない。

いざ地震が

起きたら……？

～避難先の想定～

避難先は「高いところに」が基本だ。阪神・淡路大震災においては大きな津波被害はなかったものの、阪神地域は瀬戸内海に面している。津波への警戒も怠ってはならない。

ただし、高所であっても山肌がむき出しのところや、急斜面上、その直下などは避難先としてふさわしくない。土砂災害が発生する危険があるからだ

耐震性も重要である。公共の大きな建築物は耐震工事が行われていることも多く、揺れが落ち着いてからの避難先として適している。また、そのような施設は駐車場やグラウンドなど、屋外に広いスペースを確保していることが多い。このようなスペースは、地震発生直後の建築物倒壊から逃れる場所として最適だ。

これらを踏まえて、本学の学生が頭に入れておくべき避難所は、本学のキャンパスである。下宿先がキャンパスに近い学生などは、特に覚えておいてほしい。

避難所生活を 余儀なくされたら……？

～避難所生活の心得～

避難所生活では、様々な場面で不自由を余儀なくされる。

避難所生活者にとってプライバシーの確保が難しい。ダンボールで仕切りを作ってプライベートな空間を作るといった工夫もなされている。しかし、区切られていない空間で多くの人間が生活するため、喫煙やペットに関する問題が原因のトラブルはよく起こる。

また、栄養失調からの感染症や体調不良とも常に隣合わせである。避難所の物資は限られている。普段から非常食を備蓄しておくことが大切だ。非常食は約2～5年持つものが多いが、消費期限切れには注意しなければならない。

避難所生活で一番大切なことは、譲り合うということ。避難所では高齢者や障がいを持った人達とも生活を共にする。自分の普通を押し付けないことが、少しでも快適な避難所生活を送る大きな鍵となる。

関学神戸三田キャンパスから一番近い教習所

● 取得できる車種 ●

大型車・中型車・準中型車・普通車(AT/MT)・
大型二輪車(AT/MT)・普通二輪車(AT/MT)

お申込みは、大学生協サービスカウンターにて受付できます。



SANDA AUTOMOBIL SCHOOL
SAS
SINCE 1963

兵庫県公安委員会指定

三田自動車学院

三田市志手原1147-1 TEL:079-562-2995
E-mail:sas.1963@poppy.ocn.ne.jp HP:www.sas-menkyokaiden.com



三田自動車学院携帯用HP
QRコード